

日

本は平等社会から格差社会に移行したのだからか。成果主義の浸透や企業間業績格差の広がりを目にして、多くの人は所得格差が拡大していると感じている。論壇でも、日本社会における格差拡大をテーマにした本がベストセラーとなった。しかし、本書が多くのデータを検証して得た結論は、そうした通説に反して、一九八〇年代後半以降に観察された経済全体の所得格差は統計上の「みせかけ」で、「日本の格差社会への移行を示すものではない」というものである。

米国などアングロサクソン諸国では、八〇年代以降に賃金格差が急拡大した。その理由として、技術革新、グローバル化、労働組合の組織率低下などが重要視され、どの要因もある程度の説明力を持っていた。しかし、いずれの要因も日本の賃金格差の動きをうまく説明できていない、としている。学歴間の格差、同一年齢内の格差、企業規模間の格差は必ずしも拡大していないのに、統計上は経済全体での所得格差が拡大している。というところは、グループのシェアが

『日本の不平等』

大竹文雄 著
日本経済新聞社
本体価格3200円+税



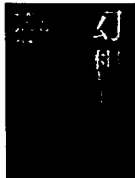
新刊紹介

● just published



西所正道 著
新報社
本体価格1300円+税

「そのツラさは、病気です」
仕事をしていても疲れがぬけない、頭が痛む、下痢が続いている、といった症状に心当たりはないだろうか。会社も家族も、ときには医者も認めない9つの病気を指摘する。



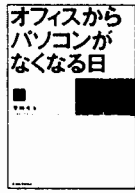
見玉 博 著
日経BP社
本体価格1700円+税

「幻想曲」
今、最も注目される経営者ソフトバンク孫正義社長に迫る。新市場を拓くために狂人のごとく前進する孫の凄みと交渉術が赤裸々に描かれる。裏ネット・バブル史の記録としても秀逸



菊地正憲 著
すばる舎
本体価格1600円+税

「なぜ結婚できないのか」
非婚・晩婚化が進む原因は、社会の急激な変化もさることながら、結婚しない娘・息子を持つ親の世代にもあるのではないのか。元新聞記者が鋭く切り込んだ本格的ルポルタージュ。



柴田英寿 著
東洋経済新聞社
本体価格1400円+税

「オフィスからパソコンがなくなる日」
ムダなメール、資料に悩む人に朗報!? パソコンがオフィスから消えるという、その功罪やメーカーの動向、代替勢力に触れつつホワイトカラーの働き方を問う。

変化したことが理由であると筆者は考える。それは「人口の高齢化」である。例えば、初任給の格差は小さいが、年齢を経るにしたがって、昇給や査定などで賃金格差は広がる。社会が高齢化していくと、同一年齢内の所得格差や賃金格差が従来と同じでも、人口構成の変化で、不平等度が高まるのである。

また、人口の高齢化と並んで世帯構造の変化も世帯間における「みせかけ」の不平等を大きくしているという。八〇年代には四人世帯が現実にも標準世帯であったが、九〇年代には二人世帯が最も多く、その次に単身世帯が多い。個人レベルでは豊かになっても、世帯人数が増加しているため、低所得世帯が増加して見える場合がある。

それでは、なぜ人々は所得格

差の拡大を感じているのか。いくつかの理由が示される。実は、低所得者よりも、高学歴者や高所得者のほうがより格差を感じている。九〇年代以降、全体の賃金格差そのものがあまり変化していない中で、大卒中高年層においてグループ内賃金格差が拡大した。団塊世代から大学進学が増え、大卒ホワイトカラーは急増した。この結果、大卒中高年層で人材のバラツキが大きくなり、グループ内で賃金格差が広がった可能性が高い。成果主義導入とバラツキ拡大は無関係ではないだろう。その他の理由として、九〇年代のゼロインフレ、デフレが考えられる。

平均賃上げ率ゼロの下で従来の賃金格差を維持すれば、賃上げ経験者と賃下げ経験者が発生する。そのことは人々に格差をよ

り強く実感させた可能性がある。消費格差が所得格差以上に広がる現象が、五〇歳未満で観測されている。消費水準は一時点の所得よりも、生涯所得を反映すると考えられる。消費格差は、将来の所得格差拡大の可能性を示唆しているのかもしれない。

このほか、IT化は賃金格差を拡大するか、卒業時に不況に遭遇した団塊ジュニアや、極端に人口の多い団塊世代などは、他の世代に比べて損をしているか、近年の成果主義的賃金制度の導入は労働意欲にどう影響したか、といった、どの世代にとってもわが身のこととして興味をそそられる疑問について、丁寧な実証分析から解き明かしている。日本の不平等問題を論じる際の必読書である。

BNPのバ証券チーフエコノミスト
文=河野龍太郎
text by Ryuraro Kohno